還相回向と常行大悲

藤原幸章

一

宗祖親鸞において謹案せられた選択本願・浄土真宗は、往還二種の回向を根本綱要とすること、そうして二種の回向とは、阿弥陀如来の本願力回向の二相そのものにほかならないことは、『教行信証』「教巻」の冒頭に

謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。（「東本願寺版真宗聖典」（以下、聖典と略称）一五二頁）

といい、また『浄土文類聚鈔』には大行の釈下に

しかるに本願力の回向に二種の相あり、一つには往相、二つには還相なり。（「聖典」四〇三頁）

とあることによって明瞭である。

ところで親鸞はこのような如来の本願力回向のなか、往相の回向についてわれわれ衆生の往生成仏の因果を確かめて、これを真実の教行信証の四法に開示し、また還相の回向についてはこれを往相の証果からひらかれる「利他教化地の益」と領解したのであった。かくして親鸞は、真宗の教行信証・因果・往還のことすべてが如来の本願力回向のめぐみであり、活動相ならざるはなしと仰いで、ここに「大無量寿経の宗致、他力真宗の正意」を領受したのであっ

た。

往相還相の回向に
もうあわぬ身となりにせば
流転輪回もきわもなし
苦海の沈淪いかがせん（『正像末和讃』「聖典」五〇四頁）

無始流転の苦をすてて
無上涅槃を期すること
如来二種の回向の
恩徳まことに謝しがたし（同右、五〇四頁）

とは、かくのごとき如来二種の回向を根源とする浄土真宗に遇いえた親鸞のその身における、全身的な感動と謝念の表白である。かくしてここに誕生したものが主著『教行信証』であった。この書の構成についてここに特に注目したいことは、二種の回向のなかの還相利他教化地の益が、まさしく往相回向の行信によってもたらされる往相証果、即ち無上涅槃を証しえてのち、それを本質としそれを背景としてはじめて開示せられているという事実である。われわれはいま特にこのことに注目してここからわれわれの課題を提起したいとおもう。すなわち〝還相回向と常行大悲〟の問題である。

二

上述のごとく親鸞において還相利他教化地の益が、特に真実証をうけてここに初めて成立するものとせられていることは、還相利他の活動は、真実の証すなわち「利他円満の妙位、無上涅槃の極果」を証しえて、これを本質とする

ことなしには成就しえないという事実をふまえた発言であるというべきである。換言すれば、いまだ涅槃の妙位を究めることなく、いま現に求めつつある往相の過程にあるわれわれにおいては、どれほど論理的要請に迫られようとも、また知識的理解に利便をえようとも、還相普賢の徳は、これを小慈小悲もなくただ念仏もうすほかにはありえない現実のこの身のうえには、いかにしても承認しえないということを意味する。真の還相利他大悲の実践は、これを臨終一念の夕を契機として超証せられる大槃涅槃の彼岸に要期するほかにはない。ここではおもうがごとき無碍自在な有情利益など望まれるべくもない自身の邪悪な足下が悲しまれているからである。

しかるに大悲の仏心は、不実な現在を傷むこの身を機としてのみ真によく徹到したもうのであった。「いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざる」（『歎異抄』三、「聖典」六二七頁）煩悩熾盛のこの身のための仏心であり、大悲大願であるからである。これによってこそわれわれにも成就するものが「信心歓喜乃至一念」の体験であり、金剛の信心である。これこそ「本願力回向の信心」であり、願作仏心・度衆生心を内実とする大菩提心であって、まさしく「真心徹到」した〝横超他力の金剛真心〟そのものである。かくしてここにひらかれるものが金剛の真心を獲得するものに保証せられる現生十益であって、それは真宗救済の現実性を標示する「入正定聚の益」を背景とした「現生無量徳」であるけれども、いまの場合、先の還相利他大悲の徳に対して特に注意せられるべきは、そのなか第九の「常行大悲の益」である。それはもとより真実証から展開する還相の利他行ではなくて、いま現に貪瞋邪偽奸詐百端というほかはないこの身にたまわった、往相回向の大信心のめぐみである。したがって具体的にはこの身の現在を場として行ぜられる「自信教人信」以外のものではないというべきである。これについては後にさらに言及するつもりであるが、それは「信巻」真仏弟子釈下に引用せられている『安楽集』が『大悲経』によっていうごとく、また同じくここに掲げる『往生礼讃』日没讃文にいうごとく、要するに往相回向の大信心に必具する「身ずから信じ、人をおしえて信ぜしむる」（『恵信尼消息』五「聖典」六一九頁）はたらきである。しかもそれこそ「まことの仏恩を報いたてま

つる」（同上）行為であり、まさしく「如来選択の願心より発起」した、たまわりたる信心のおのずからなる現生への発動である。このことは人を教えて信ぜしむる大悲行そのものが、すでに「われよくなす」の思いをはなれた仏力の恩徳に運ばれる以外のものでないことを語るものといえる。そのゆえであろうかここに引用せられている『礼讃』の本文は、当時の流伝の諸本が一致して「大悲伝普化」とあるにも拘らず、特に「大悲弘普化真成報仏恩」と表示せられ「大悲弘く普く化するは」と訓まれている。この事実は親鸞における自信教人信の化他行の根本性格を物語るものといえないであろうか。『歎異抄』第六条には「ひとえに弥陀のおんもよおしにあずかりて念仏もうす」（「聖典」六二九頁）といい、『和讃』には「無慚無愧のこの身にて　まことのこころはなけれども　弥陀の回向の御名なれば　功徳は十方にみちたもう」（『正像末和讃』「聖典」五〇九頁）と詠ぜられている言葉が思いあわされる。いまの常行大悲の益が特に第八の「知恩報徳の益」に直接して語られていることも単なる偶然ではあるまいと思われる。尤も親鸞が依用した『礼讃』の本文は、智昇の『集諸経礼懺儀』の下巻によるものであることは、親鸞みずから随所に註記しているごとくであるから、いまもこの『懺儀』の原文のままを忠実に引用したまでであるのかもしれない（「化巻」真門釈下の引用も全く同じ）。けれども特に『懺儀』によっていること自体が偶然とのみ見のがしえないものすら感じずにはいられないものがある。

親鸞的領解によれば、われわれの往相面における利他教化の行動のすべては、獲信一念の直接的利益として賜りたる信心の現実的具体的表現である常行大悲の益にこそ求められるべきであって、それは決して真実証を本質として展開する還相利他教化地の益と混同したり、おきかえられたりするべきではない。現在の往相面にあるこの身として、もしよくこの場にして還相利他行を実践しうるとしたならば、もともと如来の二種回向をまつまでもないであろう。五劫思惟の願も仏のためにはその詮なきものと同様である。それゆえに「今生に、いかに、いとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがた」（『歎異抄』四、「聖典」六二八頁）いこの身の現在にあっては、ただ念仏の信心ひとつに

生かしめられるほかにはなく、それがおのずからにして自信教人信の徳を具する「常行大悲人」の地位におし出されるにすぎないのである。私はかねがね往相面の現在においては、ゆめゆめ還相利他行を語るべきではなく、あるいは往相還相の相即とか、往相即還相というごときは、どこまでも現在のわれわれ自身の上には承認せられるべきではない。それが敢て承認せられるとするならば、ただ如来においてこそ求められるべきであり、したがってわれわれとしては大般涅槃を超証しえた真実証の上にのみ認められるべきものと推考してきた。それゆえにたとえば〝彼の土に生じ已って後、穢国に還り来って人天を度する〟というごとき還相の概念は、人間のもつ論理の外にあるとか、知識的理解を妨げるとかの理由にもとずいて、これを自身のもつ論理の場に引き降したり、あるいは常行大悲の益をもってそれに擬したりするべきではない、と考えてきたことである。そのような推究が思弁的理論的に精緻であればあるほどに、却って現実とのこえがたい溝渠に阻まれて、満たされざる虚しさを禁じえないものが残る。一体これはどのように考えられるべきであろうか。親鸞教として最も妥当な領解はいかにあるべきであろうか。

以下においてわれわれの視点をここに定め、これを『教行信証の諸問題』に確かめてゆきたいとおもう。

三

『教行信証』の研究は、文字通り故稲葉秀賢先生のご一生を貫く課題であった。このことは先生の一〇〇余に及ぶ著書論文の中心課題が常にこの一点に定められていたこと一つに顧みても、よくうなずかれるところである。そうしてその先生畢生の成果であり、集大成ともいうべきものが、すなわち『教行信証の諸問題』であるといえる。この書は新しく一気に書きおろされたものではなくて、先生が多年にわたって懐きつづけてこられた『教行信証』研究の諸課題を、一つ一つ御自身の問題を機縁として『教行信証』に問いかけられた結果、そこからひらかれてきた領解をさらに聖言論説に照らしつつ、その都度まとめられたものの集大成といえる。この意味において本書は、まさしく先生

の生涯を貫く『教行信証』行学の書であり、真宗聞思の書というべきである。したがってこの書は二〇指にも余る先生の全著作の中で文字通りの代表作として位置づけることができるであろう。

本書の全巻を貫く先生の研究方法、乃至は根本姿勢ともいうべきものは、先生が修学時代から吸収蓄積してこられた西洋哲学、倫理学の近代的思考方法を駆使しつつ、しかも長きにわたって構築せられてきた真宗先学の伝統的研究の成果を充分に尊重し咀嚼して、旧套になずまず、新しきをてらわず、刻々に遷りゆく時代の要求に対応しうるような学的方法をもって一貫せられている。このことは単に本書のみに止らず、どの著著においてでも一読直ちにうなずかれる事実である。殊に『教行信証』の研究というごとき、ともすれば閉鎖的な伝統的解釈にとらわれがちな傾向の強い中にあって、しかも本書のような新しい息吹をいぶく研究成果がわれわれの手の前に残されていることは、われわれ自身はもとよりのこと、後に続く研究者にとっても、どれほど尊い指標と高い恩恵を与えることか、はかりしれないものがあるとおもう。殊に随所に『六要鈔』にたずね、また諸先学の労作、就中、先生が直接師事せられた住田智見講師の諸著に確かめるというような慎重な姿勢は、ともすれば伝統を軽視しがちな現在のわれわれに対して、まさに頂門の一針に値いするというべきであろう。本書の行信に関わる論考の中で「願即行、行即願」というような用語が見られるのも、私個人にとっては懐しく且つ身近かに感ぜられることの一つである。これは住田講師を継承せられたわが旧師安井広度講師が、しばしば用いられた用語であるからである。

さて本書は初めの〝第一　教行信証の構造〟の問題から、最後の〝第十　三願転入の実践的意義〟にいたる全十章段から成り、『教行信証』全巻の開顕内容すべてに精緻な論究がなされている。敢て「教行信証の諸問題」と主題せられているごとく、この第一章段から第十章段の間に〝真実教の性格〟及び〝教行の関係〟（第二・第三）、〝真実行の意義〟（第四）並びに〝行巻に於ける曇鸞教義の展開〟（第五）を経て「信巻」にすすむ。ここでは曾って華やかな論義をよびおこしたいわゆる〈信巻別撰説〉に関説しつつ、「信巻」の全六巻に占める本来的な地位、並びにその〝中心課

題〃を論じ、われわれの当面の関心事である〃常行大悲の益について〃述べる(第六・第七・第八)。そうして「証巻」に入りその重要主題である〃還相回向〃論をとりあげる。ここでは往還二種回向をもって『教行信証』全六巻の根本構格とさだめ、顕真実の前四巻を往相回向、「証巻」の後半、還相回向論以下つづく「真仏土・化身土」両巻のすべてを還相回向の表現であるとみきわめて、堂々の論陣がはられている(第九)。まさに独自の発想にもとづくユニークな論究というべきであろう。そうして最後が上記のごとく〃第十　三願転入の実践的意義〃であるが、それは『教行信証』の出発点であり、同時に終着点でもあるというべき真実の信心を核とする、厳しい実践に裏打ちせられた真仮批判の体験を論じたものであって、本書の終章をかざるに適わしい論述である。

されば本書には特に「真仏土・化身土」の両巻に直接した標示や章段こそみられないけれども、内容的には完全に全六巻の主要課題は尽されているのであって、ここにおのずから先生の『教行信証』領解の体系的な集大成がなされている貴重な労作である。中において、どこに最重点をみるかは、読むものの課題や問題意識に応じておのずから異ってくるであろうけれども、私自身においては、第八の〃常行大悲の益について〃及び、つづく第九の〃還相回向の表現〃の二章段が、まさしく前述した私の課題に密着した内容をもつものとして見遁しえないところである。それゆえにここでは今、とくにこの二章段に聞くこととしよう。

四

はじめに〃還相回向の表現〃から聞くこととしたい。還相回向論についてその正当な領解が定まるならば、われわれの現生のこの場における利他大悲行の実践は、これを往相回向の真実信心にめぐまれる常行大悲の益に求めるほかはなく、したがって常行大悲をもって直ちに還相利他行とおきかえたり混同したりすることも避けられるものと思われるからである。ところでこの〃還相回向の表現〃は、大谷大学研究年報に発表せられた論文の一つであって、独自

性豊かな極めて示唆に富む論究であるから、単にその概要を紹介するだけでも意義深いものがあるけれども、可成りの長文であるから詳細にわたることは割愛して、今はわれわれの課題に関わる事柄のみに限ることとしよう。

○

『教行信証』の構造を考える場合、旧来ともすれば六巻の構成に有機的関係を見出すことに重点がおかれて、この書の全体を貫く文脈が見落されがちであった。その顕著な例として還相回向の問題がある。そこで今特に全体を貫く文脈に注意して、六巻を仮に一巻におさめて考えるとき、第一に注意せられることは、総標二種回向の文である。これこそ浄土真宗を示す綱要であって、ここに立って推求するならば「教巻」から「証巻」に至る真実四法を総結する文までは、総標二種の標文中「往相の回向について真実の教行信証あり」に直接するものである。そして「証巻」の以下に続く「二つに還相の回向と言うは、すなわちこれ利他教化地の益なり」という以下は、巻頭総標の「二つには還相なり」とあるをうけることは明かである。したがって六巻全体を一巻に摂めるならば、これ以下全巻を終るまでは、還相回向を明すものとみられる。かくのごとくみる場合、「後序」終りの『安楽集』の連続無窮の引文、並びに最終の『往生要集』による『華厳経』の偈の引用等、すべてが還相回向の意をもつものとみることが出来るであろう。尤もかくのごとく「化身土巻」が還相の内容を顕わすとみる見方には異論もあろうけれども、この巻が特に「真仏土巻」から開出せられたことに着目するならば、おのずからその意はうなずかれるであろう。即ち「化身土巻」は真仮相対すれば仮の四法を明すものであるけれども、それは常に真実に入らしめるための聖権化益であって、かくして逆悪闡提すらすくわれるのは、全く還相の利益、利他の正意に外ならない。「化身土巻」はもとより『観経』のみに限られず、聖道諸機等の「仮」から、さらに六十二見九十五種の邪道といわれる「偽」をも含んでいる。けれどもそれらを代表するものが『観経』であって、そこに「化身土巻」のもつ広い意味も明らかにせられる。もともとこの経を構成する王舎城の悲劇は、『観経和讃』に詠ぜられているごとく、極悪底下の衆生のための善巧摂化の大悲に外ならず、

従ってここに登場する人々は「大聖」と仰がれる「権化の仁」であって、このようなこの経の経説は親鸞においてはそのまま還相回向の内容としてみられたに相違なく、かくしてこの経に代表せられる「仮」も「偽」も還相回向とみて差支えないであろう。『文類聚鈔』にも往還二回向を結んで『教行信証』総序の教興を示す文が出されるのは、これによって還相回向の内容の多含性を示すものであり、これによっても「証巻」の、前述した「二つに還相回向と言うは……」との標文が、それ以下の全体にかかる広義のものであることが理解せられるであろう。

ところで還相回向は「利他教化地の益」としてその内容は本質的に無限定の広さをもつとすれば、それは往相回向との対向においてどのように表わされているのであろうか。還相回向が「証巻」の後半に明されてくるのは、それが真実証の内容としての利他教化地であるからであって、その根源はどこまでも真実証になければならないことを意味する。とすれば真実証からいかにして還相利他の大用が展開するのであろうか。

これについては「証巻」に滅度についてこれを「常楽……一如」と転釈しているところであるが、それは「証」が無上涅槃の極果そのものであることを示すとともに、そのままその内面的性格を語るものである。しかるに次にこれをうけて「しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化種種の身を示し現わしたもうなり」（「聖典」二八〇頁）といって、弥陀が従如来生の仏であることが示される。一見唐突の如くであるが、実はここにこそ還相回向の伏線があるとみられるのであって、いまこれを『文類聚鈔』に対応させるならば、そこでは同じく滅度を転釈して「常楽・大涅槃」と定め、続いて「すなわちこれ利他教化地の果なり」とあって、涅槃を特に「利他教化地の果」とあらわしている。利他教化地の果とは還相回向を「利他教化地の益」（「証巻」）とのべたものと同一意味であるから、ここに〈涅槃は即ち還相回向の果〉であるとの領解が示されることとなる。とすれば滅度・常楽の証果を得るところにおのずから還相回向の益を示現するものと示すのが、いまの「従如来生」の文といえるであろう。いうところの「従如来生」とは「法性のみやこより衆生利益のために娑婆界にきたりたもうゆえに、来をきたるというなり。経には従如来生と

のたまえり」（『唯信鈔文意』、真宗法要本「聖教全書」二―六二六頁）と解説せられているところである。さらに「報応化種種身」とは、下に還相回向を明すについて、最初に掲げられた『浄土論』の利行満足章の文に、「大慈悲をもって一切苦悩の衆生を観察して、応化の身を示す。生死の園、煩悩の林の中に回入して、神通に遊戯して教化地に至る」（「証巻」聖典二八四頁）とあって、特に応化身を示すことが教化地の相であることを明らかにしているが、これはそのまま還相回向の内容そのものである。「願土にいたればすみやかに　無上涅槃を証してぞ　すなわち大悲をおこすなりこれを回向となづけたり」（「高僧和讃」「聖典」四九一頁）といい、また「このさとりをうれば、すなわち大慈大悲きわまりて、生死海にかへりいりて、よろずの有情をたすくるを、普賢の徳に帰せしむともうす」（『唯信鈔文意』「聖典」五四九頁）等とあるは、明かに普賢の徳としての還相利他のはたらきを示すものとみられる。

しかるにかくの如き還相利他の化用は、如来によって信心の行者に与えられるものであって、それは往相の行者がうる真実証のおのずからなる発動である。従って浄土の菩薩のもつ利他教化と、弥陀の利他教化のはたらきとは、一応は区別せられるべき筈である。にも拘わらず「証巻」には、「弥陀如来は如より来生して、報・応・化種種の身を示し現わしたもうなり」と、還相利他のはたらきを示すのに、殊更弥陀の利他のはたらきを挙げているのは何故であろうか。

もともと阿弥陀の本願は「ちかいのようは、無上仏にならしめんとちかいたまえるなり」（『末灯鈔』五「聖典」六〇二頁）であって、われわれをして無上涅槃のさとりに至らしめんがためである。しかるに無上涅槃は先の転釈のごとく、真如であり一如である。それゆえにこそ弥陀如来は如より来生して種々の身を示現することによって、無上涅槃を知らしめるのである。されば『法事讃』の「弥陀の妙果をば号して無上涅槃と曰う」とあるを「利他円満の妙位・無上涅槃の極果」とあらわした親鸞の意趣は、真実の証が主伴不二、弥陀同体の証果であることを示すと共に、その無上涅槃の内面的意義を弥陀に托して示したのである。真実の証が弥陀同体の証果であればこそ、利他真実の証果た

りうるのである。しかもその真実証は還相回向の利他のはたらきを欠くならば、真実たることができず、却って報・応・化種種の身を示現する還相利他において、無上涅槃の極果が明かにせられるのである。それゆえに従如来生の文は還相回向を開く伏線として、それが「真仏土巻・化身土巻」に展開するのであって、この二巻が「証巻」から開出せられるというのも、それが真実証の展開とみられるからである。

かくして弥陀如来は如より来生して一切衆生をして往生浄土せしめ、無上涅槃の証果を得せしめ、釈迦は世に興出して八万四千の法門を説いて衆機を調熟し、遂に無上涅槃に至らしめられる。善導が「娑婆の化主、その請によるがゆえに、すなわち広く浄土の要門を開く。安楽の能人、別意の弘願を顕彰す」といったのもこの意味であって『観経』に代表せられる「化身土巻」が、還相回向の具体的表現として味得せられる所以も、その淵源はここにあるといえる。

「証巻」のこのような体勢において還相回向が開かれてくるとすれば、還相回向の内容をなすものは、単に「証巻」のみに止らず、それはつづく「真仏土巻」・「化身土巻」に及ぶことが承認せられなければならない。二回向四法の関係について『教行信証』の教義を論ずる場合、因果門と二回向門の扱いのあることが旧来から注意せられてきた。そうして『教行信証』は特に因果門を主とするといわれている。この場合には行信の因によってうる真実証は、自利利他円満の証果であることを示して、還相回向は「証巻」に摂せられる。これに対して二回向門の場合は還相回向は四法の外に出て、四法は往相回向の内容となる。『教行信証』が『文類聚鈔』のごとく絶対門ではなく、真仮批判の相対門であるという立場からは、特に因果門が『教行信証』の所明であって、前五巻は真実の教行信証、「化身土巻」は方便のそれを明すこととなる。しかし還相回向を明かにしようとするならば、二回向門の扱いを忘れるべきではない。のみならず絶対門の立場が『教行信証』にはないとはいえないであろう。とするならば特に二回向門に立って、還相回向の表現が「真仏土巻」にわたるとみた場合、還相回向はいかに表現せられているであろうか。

以上が〝還相回向の表現〟と題せられたこの論考の基調である。かくしてこれに基いて以下を三項目に分ってその具体相を詳密に展開してゆく。三項目とは、(イ)還相回向の直接的表現、(ロ)「真仏土巻」の根源的表現、(ハ)「化身土巻」の具体的表現、がこれであって、この中(イ)の直接的表現の場とは「証巻」である。従って還相回向についてこれを直接的に表現したものが(イ)の「証巻」後半の還相回向論であり、以下の(ロ)(ハ)はそれぞれの標目に明示せられているごとくである。

かくの如き『教行信証』の基本領解は先生の独自性が豊かに発揮せられた鋭い着想であるというべきであろう。これによって思われることは、還相回向は往相回向のめぐみとしてひらかれるものであって、往相の過程にあるわれわれの現在において直ちにこれを行じうるごときものではないこと、それは『教行信証』が因果門からみられても、また二回向門から捉えられても、いずれにあっても往相証果をうけて還相利他が開出せられることに変りはない。特に本論考は二回向門に立つ論述であるとみられるのであって、この点からいうならば『教行信証』の構成は二つの部門から成る。即ち第一部門は往相回向であって、内容的には教・行・信・証（前半）の四巻がこれに当り、第二部門は「証巻」還相回向論以下、「真仏土・化身土」の全巻がそれであるとみられる。それゆえに巻頭にはこのことを「謹案浄土真宗有二種回向一者往相二者還相」と総標し、その中まず第一部門の往相回向から説き起こして「教巻」から「証巻」へ至り、真実証を説き終って後、ここから第二部門還相回向にうつり、かくしてそれはこれ以下最後に至るまでの全巻にわたるものといえる。とするならば往還二種の回向は、本質的には阿弥陀如来の選択本願・浄土真宗そのもののはたらきであることもとよりのことながら、ここからめぐまれる還相利他教化地の益は、往相証果を本質とし根源とする利益であることまた明瞭である。従ってわれわれにおいては、往相回向の利益としての真実証を証することなしには、還相回向の利益もまたありえないといわなければならない。さらにまた往相・還相の相即ということも、上に言及した阿弥陀如来の従如来生論においておのずから示されるごとく、それは如来についてのみ承認せられると

ころであって、これまたわれわれの現在において主張せられるべきものではないことがうなずかれるであろう。ただわれわれとしては還相回向の具体相は、本論考に従って「化身土巻」の「仮・偽」の諸体系にこれを仰ぎみるほかはない。

とするならば求めゆく往相面のわれわれにゆるされる利他行の実践は、ただ一つ往相信心の利益としてめぐまれる現生十益の常行大悲の外にはありえないといわなければならない。しからば常行大悲の益とはいかに領解するべきであろうか。幸いにも本書にはこの問題についても一章段が設けられていることは上述のごとくであるから、つづいてこれに聞くこととしよう。

五

「信巻」に開示せられた現生十益の中、当面の「常行大悲の益」については、内容的には後の真仏弟子釈下に引用せられている経釈の文、就中、『安楽集』によって引用せられた『大経』及び『大悲経』の文がまず注意せられる。この中『大経』の文は特に菩提心の体徳、即ち信心の具徳を示すものと思われる。かくして常行大悲は信心の具徳であり、根源的には浄土の大菩提心、即ち信心のもつ願作度生の心に基くものと領解せられる。従って信心におのずから願作度生の心を具することは、常行大悲といっても願作をはなれた度生でなく、自信をはなれた教人信でもないことを示している。むしろ自信に相即した教人信、願作仏心に相即した度衆生心のほかに常行大悲はないのである。このことを証するものが『安楽集』第五大門による『大悲経』の引用である。その中特に「もし専ら念仏相続して断えざれば、その命終に随いて定んで安楽に生ぜん」(「聖典」二四七頁)といい、「もしよく展転してあい勧めて念仏を行ぜしむる者は、これらをことごとく、大悲を行ずる人と名づく」(同上)等とある文であろう。蓋し一念の信心に具する願作仏心はそのまま度衆生心であるから、念仏者はおのずから法爾自然に大悲を行ずるのである。それゆえに願作仏

心に具する度衆生心を常行大悲というのであって、「信巻」に「願成就の一念は、すなわちこれ専心なり。……真実信心すなわちこれ金剛心なり。金剛心すなわちこれ願作仏心なり。願作仏心すなわちこれ度衆生心なり。度衆生心すなわちこれ衆生を摂取して安楽浄土に生ぜしむる心なり」（「聖典」二四一頁）といわれたのはこの意味である。

かくして常行大悲とは大悲の本願を信楽する信心に具する願作度生の心であり、自信教人信といわれる信楽の具体相に外ならない。これが真仏弟子釈下に引用せられた『安楽集』の文から引き出される常行大悲の意味である。それは「小慈小悲もなき身にて　有情利益はおもうまじ　如来の願船いまさずは　苦海をいかでかわたるべき」（「正像末和讃」「聖典」五〇九頁）とか「無慚無愧のこの身にて　まことのこころはなけれども　弥陀の回向の御名なれば　功徳は十方にみちたまう」（「聖典」二八五頁）と詠ぜられるごとく、有情利益など思いもよらぬ悲傷の中にあって、わが内なる回向の法が有情を利益するのである。弥陀回向の法としての念仏に働かされる自信のままが、教人信の常行大悲をなすのである。それゆえに自行の外に化他があるのではなく、自信の外に教人信の思いを要しないのであって、況んやわれ大悲を行ずるというごとき貢高の心の動く余地はない。われわれが先に善導の『礼讃』の原文を「大悲弘普化」と引用せられた祖意、並びに特にそれが「知恩報徳の益」に直接する信心のめぐみとして挙げられた事実に注目した所以もここにある。それはまことに生々とした念仏者の具体的実践であって、かくのごとき念仏の実践以外に真宗救済の事実を物語るものはないのであって、ここに常行大悲の重要な意味がある。

常行大悲の益についての論究の本質的なものは大体以上の如くであると思われるが、われわれの課題に関して特に注意するべきは、つづいて常行大悲の益と還相回向の利他行に関わる、大要つぎのごとき論述である。それは常行大悲の実践的行相をもって、直ちに還相回向の現実的顕現とするごとき言説や意見に対する鋭い批判の発言である。

○

そもそも還相利他の化用は真実証から展開し、これを本質とするものであることは動かすことの出来ない事実であ

る。それは「証巻」において還相回向はまず『論』の出第五門の文から引用せられ、殊に『論註』によって「還相とは、かの土に生じ已りて、奢摩他・毘婆舎那・方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしむるなり」（「聖典」六五頁）とあるによっても明かである。それゆえに『和讃』には「願土にいたればすみやかに　無上涅槃を証してぞ　すなわち大悲をおこすなり　これを回向となづけたり」（「高僧和讃」「聖典」四九一頁）といい「還相の回向ととくことは　利他教化の果をえしめ　すなわち諸有に回入して　普賢の徳を修するなり」（「高僧和讃」「聖典」四九二頁）といい、詠ぜられるのである。「証巻」にいう煩悩成就の凡夫生死罪濁の群萌が、往相回向の信行によって必ず至らしめられる滅度は、主伴不二弥陀同体の証果であり、浄土の菩薩の利他教化は弥陀の利他教化と別のものではなく（『愚禿鈔』上の終りに引く元照の『阿弥陀経義疏』の文参照）、この意味からも、それが真実証そのものであるとせられるのであるが、しかしそれは常に彼土の利益として説かれるのである。それゆえに還相利他の化用は、これをわれわれが現実生活の上にもつということはありえないことといわねばならない。従って還相の利益は彼土に生じ已って発動する利益として、此土の衆生からは要期の利益というべきである。第二十二還相回向の願において、浄土の菩薩がうるところの一生補処の徳と、開化衆生の利他教化の徳とが一であることを示していることによっても明らかである。しかるに一方「如来二種の回向によりて、真実の信楽をうる」（『浄土三経往生文類』「聖典」四七一頁）とか、「無上涅槃を期すること　如来二種の回向の恩徳」（「正像末和讃」「聖典」五〇四頁）であると説かれているごとく、信心をうることも、無上涅槃がひらかれるのも、往還二種の回向によるともいわれている。これによる限り、二種回向がなければ、信心はもとより大涅槃そのものも証しえないこととなる。もしそれならば還相の徳は信楽の一念に具足し、それが現実的にそのまま発動してもよい筈である。蓋し信心が涅槃の正因であるならば、その信心に自利利他円満して往還の徳を具足しなかったならば、証大涅槃ということも不可能となる筈である。しかも涅槃を証することなしには、還相の利他教化は発動しないことも事実である。それは絶対の矛盾が同時に成立するのであるけれ

ども、もしこれを平面的に理解するならば、信の一念に具足する信楽の徳は寧ろ内面的であって、それが即自的に現実生活の上に発動する態のものではない。寧ろ信の一念に具足するがゆえに涅槃の果の上に要期せられる徳でなければならない。それゆえに還相の徳はそのまま常行大悲ではないのであって、それは共に信心の利益でありながら、一は信心の自覚の否定面として実践的に発動し、還相の徳は却って信の内面性として要期せられるものである。

もし還相利他のはたらきを現実的に把握しようとするならば、われわれが上にすでに言及したごとく、王舎城の悲劇を構成する、大聖・権化の仁に仰がれる種々応化身の上こそ拝むべきである。しかしかくの如き還相の聖権化益は、われわれ自身の自覚内容としてあるのではなく、それは要期の利益としてあるのである。されば現実の信仰生活の具体的実践としての常行大悲行の益とは明かに区別せられるべきであり、それが『教行信証』の教相の示すところである、と論述せられている。なおこれについては昭和三十九年度安居の講本『浄土文類聚鈔講讃』にも、積極的に講述せられているところである。

六

以上、還相回向と常行大悲の益についての先生の基本的な見解を『教行信証の諸問題』についてたずねてきた。それはどこまでも『教行信証』そのものの表現、乃至は教相に忠実な領解であって、先生がつねづね聖教に対するわれわれの堅持するべき根本姿勢として重視せられた、蓮師の「聖教は、句面のごとくこころうべし。その上にて、師伝・口業はあるべきなり。私にして会釈する、しかるべからざる事なり。」（『蓮如上人御一代記聞書』九〇「聖典」八七二頁）との金言を頂戴せられた結果であるというべきである。しかるに教相は安心の裏づけなくして成立しえないことはもとよりであって、それゆえにこそ、例えば『歎異抄』には、われわれが上来とりあげてきた課題に対していうならば、聖道・浄土の慈悲行を対比して、聖道の慈悲が「今生にいかに、いとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがた

ければ、この慈悲始終なし」（『歎異抄』四「聖典」六二八頁）との、徹底した自身の足下の凝視と悲傷を通して否定せられるに対して、「念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもって、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり」（同上）とか、「しかれば、念仏もうすのみぞ、すえとおりたる大慈悲心にてそうろうべき」（同上）と結ばれる浄土の慈悲が、真の慈悲の実践としてはじめて肯定せられるごとくである。同じく『歎異抄』のつづく第五父母孝養章も第六弟子諍論章も、同様に邪悪なこの身の深い傷みなくしては、単なる絵空事に終ってしまうこととなろう。このことは親鸞教学のすべての原点であって、特にわれわれの今の課題に対しては何ものにもまして重要な基本原点であるといわなければならない。それゆえにこそ還相利他教化地の活動についても、これを真実証の具徳として領解せられたのであって、証大涅槃の背景なくしては、どうして真におもうがごとき衆生利益が徹底されえようか。このこと一つをもってしても還相利他教化地の活動ということは、大般涅槃の超証なくしては成り立つべくもなく、それは同時にわれわれの現実における慈悲の実践は、これを往相回向の信心によって必獲せられる常行大悲行のほかにはありえないことをあらわすものというべきである。還相回向の徳と常行大悲の益は、これを同視したり、混同したりするべきでないことは、もはやこれ以上に言葉を重ねるまでもあるまい。

最後に上来を結ぶ意味において親鸞書簡の一節を掲げよう。それは善導の至誠心釈に「もし善業にあらざるをば敬いてこれを遠ざかれ、また随喜せざれ」とある疏文を縁とする発言である。

悪をこのむひとにもちかづき、善をせぬひとにもちかづきなんどすることは、浄土にまいりてのち、衆生利益にかえりてこそ、さようの罪人にもしたしみちかづくことはそうらえ。それも、わがはからいにはあらず。弥陀のちかいにより、かの御たすけによりてこそ、おもうさまのふるまいもそうらわんずれ。当時は、この身どものようにては、いかがそうろうべからんとおぼえそうろう。よくよく案ぜさせたまうべくそうろう。（『広本御消息』一「聖典」五六二頁）